The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	杉山平一のコント
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 57-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100811
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

杉山平一のコント

斎藤理生

一　問題の所在

本論は、詩人・杉山平一（一九一四～二〇一二）が、敗戦直後に発表したコントについて考察するものである。

杉山は、詩を創作の基盤にしながら、映画評論・エッセイ・小説など、多彩な執筆活動を行った。敗戦直後にはコントもしばしば書いている（ここでのコントは、滑稽な寸劇ではなく、一九二〇年代中葉から日本に定着した、ごく短い小説を指す）。しかし、コントとして発表された作品の大半は、単行本に収録されず、集大成となった『杉山平一全詩集』上下巻（編集工房ノア、一九九七）や、『杉山平一詩集』（思潮社、二〇〇六）にも収められなかった。年譜や回想記でも言及されていない。そのため、今では杉山にコント作品があること自体が知られていない。先行研究でも同様である。佐古祐二『詩人杉山平一論　星と映画と人と』（竹林館、二〇〇二）、安水稔和『杉山平一　青をめざして』（編集工房ノア、二〇一〇）などの詩人論や、「特集　杉山平一」（『季刊びーぐる　詩の海へ』二〇一二・一〇）のような詩誌における特集、杉山の小説を論じた國中治「『四季』の最後の詩人（二）―杉山平一の詩と小説―」（『文藝論叢』二〇〇九・三）のような論文においても、コントが言及されることはなかった。

しかし、杉山のコントがまったく評価されていなかったわけではない。杉山に「竹中郁氏の手紙」（『首蓿』一九八九・一）という随筆がある。そこに引用された竹中郁の手紙の一つに「近ごろおかきのコント、みな面白い、詩の方はコチコチしてゐていたゞきかねるが」という一節がある。手紙の日付は書かれていない。ただ、同じ手紙に杉山の小説『洋服』（『文学雑誌』一九四七・五）を読んだこと、「六

月十日の大毎詩会には必ず出席」することが述べられているから、一九四七年五月に書かれた手紙であろう。それは後述するように、杉山がコントを発表し始めて間もない時期に当たる。モダニズム詩人として広く知られる先達からこのような手紙をもらい、四〇年後に随筆にも引用した。杉山は、自分のコントを支持する声を、間違いなく聞き取っていたはずである。

本論では、まず、杉山の創作活動を概観する。次に、見落とされてきたコントの書誌情報を記す。その上で、杉山がコントを書くにいたった経緯や、その創作活動の中での位相を探る。その後に、代表的と思われる作品の仕組みを分析する。最後に、詩と散文およびコントをめぐる同時代的な状況をうかがう。

このような考察を通じて、杉山のコント作品を再評価することが本論の目的である。と同時に、ごく短い小説と散文詩とエッセイとの交点に位置するような、近代日本におけるコントという表現の特性の一端を浮き彫りにしたい。

二　杉山平一の創作活動

ここでは杉山平一の創作活動の概略をたどる。主に参照するのは、『杉山平一全詩集』下巻に収録された、五〇頁以上におよぶ自筆の「年譜」である。

一九一四年生まれの杉山は、一九三四年に東京帝国大学文学部美学美術史学科に進学。この年から『キネマ旬報』に映画批評を、『四季』（第二次）に詩を投稿し始めた。卒業後は、主婦の友社他で編集者をした後、父が創設した尼崎精工で働くようになった。職務のかたわら、織田作之助ら文学仲間と共に、文藝同人誌『海風』や『大阪文学』に詩を書いた。一九四一年、第二回中原中也賞に選出される。四三年に第一詩集『夜学生』（第一藝文社）を刊行。翌年、第十回文藝汎論賞を受賞した。戦後は尼崎精工の重役、社長を勤め、倒産後は帝塚山学院短大教授として働きつつ、『文学雑誌』『現代詩』『四季』（第三次、第四次）などの雑誌に参加し、創作を継続した。

『夜学生』以降は、童話集『背たかクラブ』（国際出版、一九四八）、短編集『ミラボー橋』（審美社、一九五二）、詩集『声を限りに』（思潮社、一九六七）、『ぜぴゅろす』（潮流社、一九七七）などを刊行。並行して、『映画評論集』（第一藝文社、一九四一）、『映画芸術への招待』（講談社、一九七五）などの映画評論、『詩のこころ・美のかたち』（講談社、一九八〇）や『現代詩入門』（創元社、一九八八）、『三

好達治　風景と音楽』（編集工房ノア、一九九二）などの詩論や詩人論、『映像の論理・詩の論理』（創元社、一九八七）、『低く翔べ』（リクルート出版、一九八七）などのエッセイを発表した。晩年には『杉山平一全詩集』上下巻をまとめ、『戦後関西詩壇回想』（思潮社、二〇〇三）のような記録を残すと共に、詩集『希望』（編集工房ノア、二〇一一）を上梓するなど、他界する直前まで創作を続けた。

このように、杉山は約八〇年間という長きにわたって執筆を継続した。その軸は詩と映画評論である。同時に、特に敗戦直後には、活動の幅を広げていたこともわかる。童話や小説も書いていたからである。『背たかクラブ』や『ミラボー橋』は、文壇や読書界で広く知られるまでにはいたらなかったが、後で触れるように、雑誌や新聞の書評で取りあげられるなど、一定の評価は得ていた。

しかも、この時期には探偵小説にも手を染めていた。そのうち『星空』（『新探偵小説』一九四七・四）は鮎川哲也・島田荘司責任編集『密室遊戯』（立風書房、一九九二）に、『赤いネクタイ』（『新探偵小説』一九四七・七）は渡辺剣次編『13の密室　続』（講談社、一九七六）およびミステリー文学資料館編『「X」傑作選』（光文社、二〇〇二）に、それぞれ収録されている。数十年後にアンソロジーに採られたことは、杉山の散文作品が、単なる余技の水準を越えていたことを示している。

生前に刊行された『杉山平一全詩集』上巻には詩が、下巻には童話や小説が収められている。上巻には、戦時下に書いた戦争詩も残らず収録するなど、すべての作品を網羅しようという意志がうかがわれる。しかし、下巻は、そこまで徹底して網羅しようとはされていない。その結果、洩れてしまった作品がある。そのなかに多くのコントがある。

では、杉山はいつ、どこに、どのようなコントを書いていたのだろうか。

三　一九五〇年前後の創作活動

三・一　杉山が発表したコント

現段階で、杉山のコントは九つ見つかっている。いずれも生前の単行本に未収録である。(1)

日曜コント　水　『毎日新聞』大阪版一面　一九四七年二月一六日

探偵コント　夜番	『K.O.K』	一九四七年五月
原子小説　軌道	『中京新聞』一面	一九四七年一一月二四日
日日コント　切符拝見	『大阪日日新聞』二面	一九四八年九月二〇日
はなしのおとしだま　鏡餅	『夕刊毎日新聞』四面	一九四九年一二月三一日
四百字小説「枠」	『都新聞』一面	一九五〇年一月九日
一分間コント　お菓子	『大阪日日新聞』二面	一九五〇年三月二〇日
コント　日曜日	『朝日新聞』大阪版四面	一九五一年四月二二日
コント　初旅	『大阪日日新聞』二面	一九五二年一月八日

『K.O.K』は京阪神で読まれていた雑誌。『大阪日日新聞』は大阪で、『都新聞』は京都で、『中京新聞』は名古屋で発行されていた夕刊新興紙である。つまり、杉山は敗戦直後の約六年間に、全国紙の大阪版や関西の新興紙・雑誌にコントを発表していたのである。いずれも、短いものは四〇〇字、長いものでも二〇〇〇字程度に収まる、ごく短い小説であった。

いま判明している限りでは、杉山の戦後の創作は、一九四六年六月に始まっている。それから五二年一月までの間に、六四編の詩・小説・童話・コントなどを発表している。その内の九編というのは、少なくない数だと言えよう。

コントの内容も多岐にわたっている。

『水』は、戦場でひどく渇いた後ようやく水を得た兵士が、故郷の神社の夢を見たおかげだと手紙に軽い気持ちで嘘を書いた。復員すると、その嘘が伝説となり、神社がにぎわっているのを知ったという話である。

『夜番』は、元通信兵の男が、深夜に響く夜番の拍子木にメッセージらしきものを聞き取った。それは強盗に連れ去られつつあった夜番が、拍子木で危機を告げるモールス信号を打っていたので、無事に逮捕にいたったという話である。

『切符拝見』は、混み合った電車の中で、語り手たちが車掌に切符を確認された。直後に、今の車掌は偽者だという声があがる。そこに来た別の車掌に人々が殺到する。車掌は聞き取りをして立ち去る。実は、後の車掌の方が偽者で、あわてふためく人々の隙を突いて、

仲間と掏摸を働いていたのだったという話である。

『鏡餅』は、隣家の貧しい家族の足音を聞きつける語り手が、その異変を通じて、彼らの小さな幸福を知る話である。

『「枠」』は、語り手が古道具屋で、額入りの天皇の写真が売られているのに心を痛める話である。やがて額だけが売れ、写真は放置されていたことに語り手は疑念を覚え、もらって帰る。

『日曜日』は、語り手が学生時代、日曜日に裏山で、ある兵隊と女工がむつまじくしているさまを何度も見かけたものの、戦争が始まると共に見かけなくなったことを思い出す話である。

『初旅』は、商売上の負債を抱えて逃げていた斎藤という男が、年が明けた直後、米原駅ですれちがう列車の中に、債権者の一人の姿を見出して焦るものの、その男に明るく励まされて、元気を取り戻す話である。

このように、探偵小説のような凝った展開の作品もあれば、随筆のような作品もある。杉山がさまざまな型のコントを試みたことがわかる。なお、これら以外の『軌道』と『お菓子』については、四章でくわしく取りあげたい。

三・二　コント執筆の背景

なぜ杉山はコントを書き出したのだろうか。なるほど当時、詩人がコントを書くことは珍しくなかった。また、杉山が戦前戦中に作った散文詩の中にも、コントと呼べそうな作品がある。たとえば『窓』（『四季』一九四三・五）である。語り手が通りがかった「古ぼけた侘しいアパートの一つの窓」を通して、その家の母子の姿や声に感じ入る作品である。この約四〇〇字の散文詩は、先に触れた『鏡餅』と似たモチーフを扱っている。しかし、『窓』をはじめ、戦前戦中の杉山の創作は、あくまで詩として発表されており、コントという枠組みは与えられていない。

杉山が戦後にコントを書くようになったきっかけには、織田作之助が関与している可能性がある。大阪府立中之島図書館織田文庫には、杉山から作之助に宛てた、一九四六年一〇月一四日付の書簡が所蔵されている。そこに次のように書かれているからである。

ケシ粒小説一篇同封。しかしこれは内容よりネームバリウで値打があるので、小生　ではいかんのでないか。機会があるのならいゝけれど、無理には、僕も気ぐるしいです。

「ケシ粒小説」とは、一九四六年六月から四七年二月にかけて『朝日新聞』大阪本社版に掲載された掌編文学シリーズを指す。[2] 作之助はこのシリーズに、すでに作品を二つ発表していた。そこに友人の作品も並べようと働きかけたのだと推察される。[3]

ただ、実際に杉山の作品が載った形跡はない。掲載にいたらなかったのは、杉山が触れた通り、知名度が重視されたからかもしれない。とはいえ、小説家の友人から慫慂された結果、コントという表現手法を視野に入れるようになったということは考えられる。

また、『毎日新聞』大阪本社版の「日曜コント」や『中京新聞』の「原子小説」には、杉山の他にも、藤澤桓夫を中心とした同人誌『文学雑誌』の面々がしばしば執筆している。[4] コント執筆の機会を、藤澤とその周辺を通じて得たことも考えられる。

すなわち、コントを書くきっかけは、関西在住の小説家の人脈からもたらされた可能性がある。ただ、めぐってきた機会を捉えて実際に作品を書いたことには、杉山の内発的な動機があったはずである。

当時の杉山は、創作者として表現手段に迷っていた。その迷いは、一九五二年に杉山が出版した短編集『ミラボー橋』の「あとがき」で明かされている。

これらが、厳密な意味で小説と呼ばれるべきかどうかは、私にもよくわからない。私は詩を書いてゐたが、詩集「夜学生」を出したあと、詩がどうあるべきかを考へるにつれ、私は詩をつくるためには自らをひどくゆがめなければならないのに次第にくるしくなつてきた。そして自分が最も素直に自分であるために、これら数々の散文を試みてみた。だが更にこれを小説にするためには、やはりまた姿勢をまげなければならないのを感ずる。そのために敢えて小説らしさをも私は捨てた。（中略）それでも「ミラボー橋」のごときは、発表した雑誌では詩として取扱はれた。「星空」は探偵小説として取扱はれ、私もまたそれを試みたのであるが、自分の好みをそのまま出してゐるので、自分のものとして集録した。

この本が詩集であるか、エッセイ集であるか、小説集であるかを私はあまり気にしない。ただ私の独自のものであるかどうかを心

配してゐる。

詩に限界を感じ、散文を試みた。しかし小説も苦しい。ついには気にしないことにした、と述べられている。(5)

杉山は、一九三〇年代から二〇一〇年代まで詩を書き続けた。しかし第一詩集『夜学生』が出たのは一九四三年で、第二詩集『声を限りに』が出たのは一九六七年である。第三詩集、第四詩集が約一〇年おきに出ていることを考慮すると、第一詩集と第二詩集との間に二〇年を超える長いブランクがあることは目立つ。なるほど、その空白には、『四季』を起点として生まれた杉山の叙情的な詩が、戦後の詩壇の主たる潮流に合わなかったことも作用しているだろう。しかし、杉山が自分に適した表現手段に迷っていたことも影響しているのではないだろうか。

杉山がコントを発表した期間は長くない。『夜学生』と『ミラボー橋』との間に収まる。すなわち、杉山にとってコントは、詩とエッセイと小説との区別を「あまり気にしない」ことにするまでの過程で表現されたものだったのである。

もっとも、「あまり気にしない」という言い回しからは、いまだにこだわりを抱えていることも読み取れる。この点は先行研究でも指摘がある。國中治「『四季』の最後の詩人（二）―杉山平一の詩と小説―」では、「表紙に〈小説集〉と明記されて出版された『ミラボー橋』が後に〈散文詩的小説〉（全詩集収録の「自筆年譜」による）と名称変更し、小説として書かれた作品群が〈自伝的エッセイ集〉の名の下に一本に編まれる。こうした事態はやはり杉山平一が抱懷する混迷の深さに端を発していると考えなければならない」と述べられている。一九八九年に出版された短篇集『わが敗走』においても、ジャンルの区分は安定していなかったというのである。

『ミラボー橋』のような作品をどのように評価するのか。そのことは同時代の書評でも迷われていた。無署名「書評　杉山平一著「ミラボー橋」」（『映画文化』一九五二・一〇）では「秀れた散文集」「それぞれに感銘をあたえる」とされながら「この書の文章は小説に近いが、しかし小説ともいいきれない」と断られる。それは「小説としては、余りにエッセイをふくんでいるし、エッセイとしてはあまりに詩的だからである」。また、無署名「新刊　杉山平一小説集「ミラボー橋」」（『新大阪』一九五二・一〇・一八、二面）でも、次のように評価されている。

筆者が小説として、または探偵小説として、あるいは散文詩として過去数年雑誌に発表したものをまとめたのだが、こうして一本になつたのを通読すると実におもしろい、詩人としての鋭敏な神経と科学者のような精密な論理と鉱物質的な文体はうまく調和して独自な世界を作つている、（中略）だが、作者も「あとがき」で書いているように、これらの作品群を小説と呼ぶべきかどうかは別問題で、強いていえば小説体エッセイとでも称すべきか、だから普通の小説として期待した人には蒸留水のような物足らなさを与えるだろうが、これはこれで一つのスタイルとして立派

杉山の作品について、個別の表現ジャンルを超えた魅力を指摘する声も、同時代からあったわけである。[6] 木場康治「シグナルの抒情―「ミラボー橋」について―」（『詩と真実』一九五三・一）でも、「こゝでは小説らしいプロットもフイクシヨンも駆使されてはいない。またその必要も認めていない。ただゆつたりとした抒情の流れに沿って描き出されている映画の回想形式を思はす手法があるだけだ」として、「杉山平一の志向は詩と小説の渾然たる形象への止揚にあるのではなかろうか」と推測されている。

一方で、詩人として知られる杉山が、小説家としては名を成すことができなかったのも事実である。木場は、「これを小説集だと規定されると、私はまず、頭のよい高校生の作品かと言うだけで問題にしなくなる」と指摘している。また、井上靖を話し手、篠田一士と辻邦生を聞き手とした『わが文学の軌跡』（中央公論社、一九七七）において、篠田は井上と杉山を比較し、「なにも杉山さんの悪口いうつもりはないんですけど、小説が小説にならないんですね。詩的な着想といいますか、それだけ凝縮したものが残っちゃって、拡がらないんですね」と述べている（八一頁）。

杉山の小説を取りあげた唯一の本格的な論文である國中治「『四季』の最後の詩人（二）―杉山平一の詩と小説―」では、『風浪』（『文学雑誌』一九五二・六）と『今年最後の入道雲』（『文学雑誌』一九六八・八）という二作品を取りあげて、杉山作品が、一般的な小説としての魅力を欠いていることが指摘されている。カタストロフィーやカタルシスがなく、作中人物の独立性も、物語の変化や必然性もないからである。「小説というには語り手の位相という点で写生文的でありすぎ、写生文としては描写の不活用という点で不自然な作品」だというのである。ただ「写生文的方法による小説」としては評価される。

これらの指摘は、おおむね的を射ていると思われる。ただ、一般的な小説とは異なるが、魅力はあるという作風はわかりにくい。同時

代評も先行研究も、そして杉山じしんも取りあげていないコントに目を配ると、杉山のジャンルに限定されない作品の魅力が、より鮮明になると思われる。

四　杉山のコントを読む

四・一　『お菓子』の構造

具体的に、杉山のコントを精読したい。最初に『お菓子』を取りあげる。以下が全文である。

　此間知合の三つ位のお嬢さんが遊びにきたとき、みかんを上げたところ、私の方へやつてきて「このみかん、あけて」といつた。みんな笑つたが、皮をむくというより、あけるという方が感じが出ていて、私はなるほどと思つた。私の子供も先日、いなりずしをつくつているところを見て「みんな帽子をかぶるのね」といったりした、子供と相撲をとつてわざと負けてやつていて、ときに負けないでいると、「負けて」といゝこちらの芝居を、はじめから知つてゐたりする。

　先夜お菓子を他所からもらつたのを、子供がねだるので「いやこれは、お兄さんにお供えしてから」となだめ、死んだ上の子の仏壇に供えた。寝かせたあと、いやしい私はそれをたべた。翌朝子供が私のところへ走つてきて「お兄ちゃんゆうべお菓子たべてしまつたよ、わるいねえ」といつた。私は、叱責とも皮肉ともユーモアともとりかねる気持で、子供の顔を見て、赤い顔をした。

お菓子と親子をめぐる、微笑ましい逸話として読める作品である。と同時に、そこには複雑な構造が備わっている。

このコントは二つの段落で構成され、前半と後半とに区別できる。前半には、みかん、いなりずし、すもうという三つのエピソードが、子供の発言と共に、端的に紹介されている。後半には、お供えの菓子を食べた父と、子供との対話が語られている。後半は、子供の発言だけでなく、「先夜」から「翌朝」への時間の経過や「私」の行動や表情を伴い、より具体的に描出されている。

前半では、みかんについて「感じが出てい」る表現が話題になっている。いなりずしはそれに似た例で、巧みなたとえが話題になる。

最後の相撲は「芝居」すなわち演技の話である。

後半において「私」は、子供の発言を「叱責とも皮肉ともユーモアともとりかね」て、赤面する。この後半の葛藤は、前半の、たとえや演技をめぐる三つの逸話と対応していると考えられる。

後半で、「私」および読者は、子供の発言の意味を考えるように導かれる。これは、亡くなった兄へのお供え物を、父が食べたと知らずに、兄の告げ口をしている幼い態度であろうか（兄への叱責）？　父が食べたとわかっていて、なじっているのだろうか（父への皮肉）？

やはりすべてわかったうえで、面白おかしく言っているのだろうか（ユーモア）？

「私」は結論を出していない。読者も、いずれとも受けとれる。ただ、ここには「死んだ上の子」の面影も浮かんでいる。「お兄ちゃんゆうべお菓子たべてしまつたよ」という発言は、父の脳裏に、喪った子供が生前お菓子を食べていた（あるいは食べられなかった）記憶を呼び起こしたはずである。実際に、杉山は四人の子供を得ているが、一九四五年に長男を、四八年に次男を共に病気で幼くして喪っている。『背たかクラブ』の「あとがき」にも「私はこの夏二人目の私の子供を亡くしました。このかなしみをまぎらわせるため、その幼い魂にささげる気持で、このまずしい原稿を本にあむ決心をしました」と記されている。

むろん、当時の一般的な新聞の読者には、そのような作者の個人的な事情はわからなかったにちがいない。しかし、「私」が直面している状況を理解することは難しくなかったはずである。目の前にいる子供の隣に、もういなくなった子供の姿が立ちあがる。その子が口にするべきお菓子を取った自分。そのふるまいが強く省みられたために、子供の意図は確定できないが、「私」は赤面せざるを得なかったのである。

このように、『お菓子』というコントは、読者を微笑ませつつ、考えさせる作品として構築されている。そして、竹中郁が「杉山平一童話集「背たかクラブ」評」（『現代詩』一九四九・六）において、「詩であれ、散文であれ常に杉山君の作品の特徴は知的といふことがまづ第一になつてゐる」と述べたように、知的な風合いは、杉山の創作に通底する特徴であった。

四・二　新聞と鉄道――『軌道』『初旅』『切符拝見』

次に精読するのは『軌道』である。以下に全文を掲げる。

朝の通勤時間のプラットホームの顔ぶれというものはきまつているものである。たまに時間がおくれると、ちようど夜空の星のようにもう顔ぶれが変つている。そういえば星座のように人々のホームの位置もきまつている。私はうしろから二番目の車両にのるから、三番目の柱のあたり、教師らしき人はいつも階段の手すりのあたり足の悪い娘さんはずつと前の方、大きな髪の人は待合室の入口に立つている。それら私に親しき顔ぶれも、ながい間には、季節によつてずれて行く星座のように少しずつずれて行く。それでもその人たちの地味で質素なのはいつも変りがない。

時々通勤でない人がまぎれ込んでくる。星座にまぎれこむ遊星というところであろうか。私たちの星座にぽかり出てくるそれらの人はしばしば派手で目をそばだゝせる。輪のような帽子をつけたのは土星姫、赤いドレスをつけたのは火星姫と名付けてみた。この星たちもおそらくはまた私たちとちがつた運命と軌道をもつているだろうから。

この作品は、ごく限定された時空間を扱っている。時間は朝、場所は駅のホームと明示され、そこから動かない。誰か特定の人物の言動が描かれるわけではなく、特別な事件も起こらない。毎朝の通勤電車を待つ「きまつている」メンバーが「いつも変りがない」姿で特定の場所に立ち、定時に到着する電車に乗って運ばれてゆく瞬間が切り取られている。そこに一般的な小説のような筋の展開はない。

ただ、厳密に言えば、この作品に時間の流れは存在する。メンバーが少しずつ入れ替わってゆく「ながい間」も描かれているからである。語り手は、毎朝の通勤電車を待つ人々を星々に、その立ち位置やゆるやかな変化を星座に喩えている。時には、行きずりの人が紛れこむこともある。彼女たちは遊星や惑星に譬えられる。つまり、「私」は朝の通勤という日常の一コマに夜空を重ね、異化している。天体を観測する視線によって、当たり前に見られる光景を構成するひとりひとりが「運命」を背負っていることが印象づけられる。

平凡な日常を異化する。何気ないものを、生き生きとした新鮮なものとして見つめ直させる。それは、杉山が詩でも得意とした方法であった。異化の方法と短さと筋の不在は、小説というより散文詩に近い印象を与える。『軌道』は、コントと散文詩とのジャンルとしての近さを踵を体現している。

くわえて、通勤電車、プラットホームという舞台が選ばれていることも重要である。それは、朝刊紙のように家庭に届けられるのではなく、駅で買うものであった夕刊紙（新興紙の多くは夕刊紙であった）にふさわしい表現であった。つまり、物語世界と現実世界とを同期させやすいのである。

杉山は、他の新興紙に発表したコントでも、駅や鉄道を使っている。たとえば『初旅』の冒頭は以下である。

汽車の中は、大晦日からひきつづいて、昨年のまゝの空気だつた。うす汚れた外套、泥のついたクツ寝乱れた髪、脂のういた起きぬけの顔などがスチームにむされてよどんでいた。斎藤はその片スミに一点を見詰めたまゝ陰鬱な顔をして腕を組んでいた。

思えば惨澹たる年の瀬だつた。斎藤の商売は夏前からすつかりいけなくなつていた。それをばん回しようと、無理な借金を重ねた。手形も書いた。それを待つて貰うためにバリ雑言にも耐えた。そして年の暮までには何とかなる、と得意先にも不義理を続けた。しかし、悪条件はつぎの悪条件となりあがけばあがくほど泥沼に入つて行き、約束はウソになり、人の顔を見れば謝まつている毎日になつた。

ここに描かれている斎藤の苦悩は、工業会社の社長として差し押さえや倒産を経験した杉山の私小説としても読むことができる。(7) しかし、いま注目したいのは、正月の鉄道が舞台になっていることである。それは、一月八日にこの夕刊紙を手に取る読者が自分のこととして共感したり、今まさに同じ境遇の人物が車両に同乗しているかもしれないと想像したりしやすい内容であった。杉山が新聞に発表したコントには、そのような配慮が行き届いていたのである。

『切符拝見』も同様である。先にも触れたように、この作品は電車内に偽の車掌が現れて巧みに金を奪おうとする話であり、探偵小説のような趣きがある。その冒頭は以下である。

皆様ご免倒ですが、乗車券を拝見いたします、という声をきくと乗客は正しい切符をもつていてもへんに不安な気分になるものである。というのは、人間は、何かの条件があれば不正乗車をするかもしれないという、可能性をもつているからである。このドキッ

とする気持を、私は私流に人間の原罪によるものと考えている。

先日のこと、やはり切符拝見の声がかゝつた。到着列車の客ののりかえた電車で、乗りこしがかなりあつたようだ。その車掌は、どうしたのか、素早い計算をして、その場で金をとり、赤い領収済の紙片をわたしているようだつた。定期券を見るとき、相手の名刺をしらべて、本人かどうかをたしかめて罰金をとつたり、素早いうちにも、厳重を極めたものであつた。

随筆のような書き出しから「先日のこと」以降、物語に入ってゆく。『初旅』と同様に、駅で新聞を買った読者が読むことで、より現実感を味わえる導入である。杉山は、全国紙の大阪版に掲載された『水』『鏡餅』『日曜日』といったコントには、駅や鉄道を使っていない。そのため、駅や鉄道は、単純に杉山の嗜好を反映しているばかりでなく、[8]メディアや読者に配慮した、戦略的な方法であったはずである。

五　敗戦直後の詩と散文およびコント

「コント執筆の背景」の項で述べたように、杉山は一九四〇年代から五〇年代にかけて、散文と詩との関係について思い悩んでいた。そのことは当時の評論からもわかる。「散文詩の周辺」（『現代詩』一九四九・一）では、「彼はかうして、どうして、どうなつた、と冷たく事実をつつ放してをく話が、散文を代表する小説であり、私は、かう思ふ、ねばならぬ、好きだ、それはいかんといつた、なまの意見、主張、批評が、詩のかたちの原則である。一は叙事を代表し、他は叙情をもつて支えられてゐる」と述べている。ただし、掲載誌『現代詩』が叙事詩の試みを推奨していたこと一つをとっても、小説は叙事、詩は叙情という区分は単純に過ぎる。そのことは杉山もわかっていたはずである。

また、杉山は小説の中でも、特に探偵小説が詩に近いと考えていた節がある。「探偵小説の魅力」（『関西探偵作家クラブ会報』一九五〇・九）では、「一体推理といふことは、砂を噛むやうな客観的事実の集積のやうであり乍ら、実は反対に、全然、精神的な組立てであつて、気持や空想の産物である」として、「従つて私は、探偵小説といふものが、多分に散文より詩に偏つたものであると考へてゐる」と述べる。

なるほどエドガー・アラン・ポーのような存在を思い浮かべれば、探偵小説と詩との近さは理解しやすい。もっとも、この時期以降、杉山が探偵小説を執筆した形跡はない。

いずれにしろ、当時の杉山は、散文と詩との関係や境界について、たびたび角度を変えながら思考していた。一九四七年から五二年に書かれたコントは、そのような葛藤を抱えていた杉山が、関係や境界をひとつひとつ問い直すように書かれたのではないだろうか。

もっとも、小説と詩、あるいはコントとの境界に立っていたのは、杉山だけではなかった。たとえば戦前には、フランスでシドニー・ガブリエル・コレットに「コントを書くように、コントこそは詩人の領分である」と言われたという、深尾須磨子という詩人がいた。深尾はその後、「この国において、一口にコントと呼ばれてゐるそれほどの落語的小品と一緒にされたくなかつた」がゆえに「純正コント」という言葉を用いた。深尾によれば、「短篇のルウルを踏みながら、更により鋭く豊かな、暗示、皮肉、幻想、色彩等々が加はり、一篇を通じて巧みに虚実綯ひまぜたものが純正コントである」（「小序」『ホルモン夫人と虚無僧』不尽書院、一九三七）。

また、國中治「『四季』の最後の詩人（二）―杉山平一の詩と小説―」では、次のように述べられている。

> 杉山平一の小説を考えるとき、北川冬彦の雑誌『現代詩』（一九四六年二月創刊）に杉山も加わったことを軽く見ることはできない。北川はモダニズムが衰退期に入って以来詩のさまざまな形式を考案・吟味し、戦後は散文詩や長篇叙事詩を小説との関わりにおいて追究した。北川との接点は、少なくとも戦後の一時期、杉山にとっては詩より小説でのそれだったのではないかと思う。また、第二次『四季』同人のなかに小説の創作に腐心する詩人が何人もいたことを想起する必要もある。『四季』同人のうち、詩歴、地縁、世代などの関係から杉山に近い存在だったと思われるのは、三好達治、丸山薫、竹中郁、津村信夫、立原道造であり、彼らは作風こそ違え揃って果敢に小説制作に取り組んだ詩人であった。

杉山が同人になっていた雑誌『現代詩』は、かつて『詩と詩論』の中心で「新散文詩運動」の提唱者であった北川冬彦が創刊した雑誌で、散文詩について盛んな議論がなされていた。そこでは「敗戦後、殊に最近の詩壇の作品傾向として目立つのは、散文型詩の横溢である。新鋭詩人の殆どがこの詩型を採用している」という見解も示されていた（浅井十三郎「編集後記」『現代詩』一九四八・一〇）。杉山

も「詩における肉声」（『現代詩』一九四八・一一）において、「中村真一郎の「死の影の下に」は小説であるが、そのマチネ・ポエティクの詩よりは、全人格的な肉声をもつ故に、むしろすぐれた詩である」と、小説と詩との境界を逸脱する知見を述べていた。

また、北川は「編集後記」（『現代詩』一九四九・四）で、「杉山平一、牧章造、小野連司諸君の作品は、散文とすれすれの仕事をしている（尤も杉山君はこれは小説ですがと書き添えている）」と、その小説か詩かわかりにくい作風に触れていた。

さらに、國中が述べたように、詩人が小説を書くことは珍しくなかった。『四季』派だけではない。詩人から小説家に転身した井上靖と、杉山は関西圏の詩人として戦時中から親交があった。やはり二人と交友があった安西冬衛も、戦後に新聞小説を書いている。また、敗戦直後には、前述の中村以外にも、高見順、野間宏など、詩を書いた小説家が複数いた。太宰治が戦前に小説として発表した作品が、戦後に詩として再掲されたこともあった。[9] つまり、敗戦直後において詩と小説といったジャンルの境界線は曖昧になっていた。そのゆるやかさのなかに杉山もいた。杉山のコントの脱領域性には、詩人その人が直面していた葛藤ばかりではなく、同時代的な状況も影響していたはずなのである。

さらに視野を広げれば、そこには近代日本におけるコントという表現手段の特性が反映しているように思われる。この時期のコントという形式では、いわゆる〈落ち〉のある短編小説だけでなく、随筆風、散文詩風、童話風など、さまざまな表現が許された。それは、もともと明治時代の「小品」が備えていた多様性でもあった。[10] 一九二〇年代中葉にコントが流行したときには、既存の「小品」との差異が押し出された。しかし、コントはほどなくして目新しい表現ではなくなった。それに連れて、コントにも「小品」的なものが許容されてゆく。それが一九五〇年代末以降、「ショートショート」が流行すると、再び枝分かれする。星新一に代表される「ショートショート」は、同じごく短い小説でも、虚構性が高く、プロットに工夫がなされたもので、散文詩や随筆とは異なる内容が求められていた。

杉山のコントは、詩、随筆、探偵小説、童話などと接点を持っていた。敗戦後の約六年間に杉山が書いたコントは、作品それ自体として再評価されるにふさわしい質を備えている。同時に、それらはジャンルが混淆していた時期ならではの表現としても位置づけられる。

注

（1）ただし、コントに近い「掌篇小説」という枠組みで発表された『月の出』（『知性』一九五六・八）や、『文学雑誌』一九七二年一二月号の「コ

ント特集」に発表された『もう一人の男』『女』という二作品は『全詩集』下巻に収録されている。杉山は「解題」でそれらを「詩的小品など」と呼んでいる（七四九頁）。

（2）「けし粒小説」については、拙稿「《研究ノート》「けし粒小説」とその時代―敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄」（『阪大近代文学研究』二〇一八・三）を参照されたい。

（3）作之助は同年に、他の新聞で同様の推薦あるいは慫慂をした経験があったと推測される。作之助が新聞小説『夜光虫』を連載していた『大阪日日新聞』に、「読者応募」という形ではあるが、愛人の輪島昭子や弟子の吉田定一のコントが掲載されているからである。『夜光虫』の連載は一九四六年五月二四日から八月九日まで。輪島の『日曜コント　虚栄』は六月二日に、吉田の『日曜コント　昔』は六月一六日に掲載された。

（4）「原子小説」については、拙稿「《資料紹介》「中京新聞」の「原子小説」」（『阪大近代文学研究』二〇二四・三）を参照されたい。

（5）杉山は後にも、『ミラボー橋』を書いた頃には「自分の面白いと感ずるものを訴えるのは散文の方が、ぴったりすることに気づいた」ために「私はエッセイをかいた。小説をかいた。しかし、いずれも詩だといわれた」と回想している（「詩と私」、『詩への接近　詩と詩人への芸術論的考察』幻想社、一九八〇、三六～三七頁）。

（6）この書評の執筆者は、当時『新大阪』に勤務していた足立巻一の可能性が高い。足立は後に、「現代詩文庫（16）杉山平一詩集」（『朝日新聞』一九八四・八・一二、二六面）においても、「強いイデアから発した明晰な批評の光線」が「杉山の詩、映像論、エッセーからどんな短文にまであてはまる」と述べている。

（7）『杉山平一全詩集　下』の「年譜」の一九五一年の項には「物品税滞納のため、国税局との対応つづく。銀行融資渋るため、融通手形発行。その処理に暴力団取立屋きて弱る」とある。なお、杉山の父が興し、平一が引き継いだ尼崎精工株式会社については、伊藤琴子「「杉山平一と尼崎　没後一〇年　詩と映画と人生」誌上展示」（尼崎市立歴史博物館紀要『地域史研究』二〇二四・一）にくわしい。

（8）最初に携わった同人誌を『貨物列車』と名付けた杉山は、しばしば駅や鉄道を詩のモチーフにした。

（9）拙稿「「火焔木」のなかの「雀こ」」（『太宰治スタディーズ』別冊、二〇一七・六）を参照されたい。

（10）小品に関しては、木股知史「小品文学の世界」（『明治大正小品選』おうふう、二〇〇六）を参照した。

［附記］本論はＪＳＰＳ科研費20K00346および22K00293の助成を受けたものである。

A Study of Heiichi Sugiyama's Contes

Masao SAITO

This paper examines the contes written by the poet Heiichi Sugiyama（杉山平一, 1914–2010). Sugiyama is recognized as a prominent poet of 20th-century Japan. However, the fact that he wrote contes (short stories) after World War II is often overlooked today.

The remainder of this paper is organized as follows: First, I review Sugiyama's creative output. Next, I present a bibliography of Sugiyama's contes, which has been overlooked. I then explore the factors that influenced Sugiyama's decision to write contes and the places relevant to his creative activities. I subsequently analyze the mechanics of what I consider representative work. Finally, I examine the contemporaneous situations of poetry, prose, and conte.

Based on these considerations, this essay aims to re-evaluate Sugiyama's conte works. Simultaneously, I highlight the characteristics of conte in modern Japan, situated at the intersection of short stories, prose poems, and essays.